

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	田中 俊
論文題目	空想に関する現象学的考察 — フッサールにおける空想理論の再構成		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の狙いは、前世紀ドイツの哲学者、E. フッサールによる「空想(Phantasie)」論を手掛かりにしながら、空想の現象学的分析を試みることにある。周知のようにフッサールは、本質直観を遂行する上で「自由変更」という方法論を説く。これは、空想において無数の様々なる個別的対象（例えば赤い色をした多種多様なもの）を自由自在に産み出していくことを通して、それらに共通する不変項として普遍的本質（例えば「赤」一般）を看取することを目指すものである。しかしながらこのような自由変更の操作を通して我々が捉えるものは果たして、またいかなる意味において「本質」の名に値するのか。フッサール研究者の間でも今尚論議の喧しい如上の難題に応ずる為には、本質直観の不可欠な要素としての役割を空想に与えて能事畢れりとするのではなくして、寧ろ空想に対してそのような役割が付与されることはいかなる正当な根拠に基づくものであるのかを問題にすべきであろう。そしてこの空想の権利問題の解明に際しては、そもそも当の空想をそれそのものとして現象学的に分析する必要がある。冒頭で述べたような課題を申請者が設定する所以は、まさしくここにある。</p> <p>上述の狙いに鑑みて、本論文は二篇から構成される。各篇における考察の手順は以下の通りである。</p> <p>前半部である第一篇は二つの章よりなる。第一章「フッサール現象学の基本的性格に関する素描的考察」では、次章以降の議論の足場を固めるべく、フッサール現象学の道具立てを確認する作業が行われる。これにより、現象学を特徴づける三要素 — 「志向的意識」を「記述」する「本質学」 — の内実が順次吟味されることで、「ノエシス・ノエマ構造と地平構造に基づく志向的意識」、「現実中心主義」、「自由変更による本質の看取」といった当該の学の基本的性格が浮き彫りになる。</p> <p>第二章「フッサール現象学における『現実』」は、本論文の主題たる空想概念の外延を（これと対蹠的な関係にあるものとして通常考えられている）現実概念との対比において劃定する試みである。まずフッサールの所謂「現実」が五種類に分別され、それぞれの含意が闡明される。次いでこうした分類に対応するものとして、空想の五類型が提示されるに至る。</p> <p>続いて後半部をなす第二篇は四章立てである。第三章「フッサールにおける空想の特徴とその論敵」は、哲学史上の古典的な空想論（例えばD. ヒュームの所説）に対するフッサールの批判をも考慮に入れつつ、主著『イデー I』において展開されたフッサール自身の空想論の独自性を剔抉せんとするものである。古来、空想はしばしば、生き生きとした鮮明さを失って空虚になった知覚表象と同一視されてきた。だがフッサールは、こうした「弱くなった感覚」という旧来の空想観が当該の現象を十全に説明するに</p>			

足るものではない所以を示し、如上の旧説に対して、空想の核心は寧ろ「中立性」にある旨を主張する。このように現実世界のあり方に対して徹頭徹尾中立的にして無関心であり、現実的妥当性を一切持たない点に空想の意義を認めようとするところにこそ、『イデーニ I』の創見が存するのである。

第四章「中立的潜在性から中立的受動性への変遷について」では、まず空想と潜在性の関係が究明される。空想は中立性という性格を保ちつつも、同時にまた潜在的でもありうる。つまり空想には中立的潜在性というあり方が可能なのであり、そしてこのことから、中立的な空想対象が潜在的な地平を伴って現れる事態に関しても説明が付くことになる。こうした議論を踏まえ、今述べた中立的潜在性と中立的受動性との結節点を探る試みを通じて、『イデーニ I』における静態的現象学の立場をその後の発生的現象学のそれと能う限り連続的に解釈することが本章の第二の課題となる。

第五章「『イデーニ I』における空想と『経験と判断』における空想」においては、静態的現象学というフッサールの前期思想と、彼の後期の思想たる発生的現象学との接続を図った前章の成果に基づき、各時期を代表する著作の統合的な読解を通して、空想が生ずる機序の究明が目指される。その結果、後期の『経験と判断』は、現実の知覚から空想への移行を可能ならしめる「連想」の分析に主眼を置いているのに対し、前期の『イデーニ I』は、この移行が一度なされた後の段階、つまり現実世界のそれに擬似的な時空に即して空想世界が展開されていく段階を問題にしているという解釈が示されるに至る。

終章にあたる第六章「根元臆見の中立化について」の狙いは、第三章で空想現象の核心をなすものとして詳らかにされた「中立性」を——『経験と判断』等の後期の著作を新たな手掛かりとしながら——更に立ち入って考究することにある。そこでまず、中立性によって中立化される当のものである「根元臆見」の内実が仔細に究明される。それにより、空想世界の諸対象は擬似的な時間位置に則って成立していること、諸々の信念は根元臆見の働きによって初めて現実的な妥当性を有しうること、そしてこの現実的な妥当性を下支えしているのは「唯一の世界という統一へ向かう欲求」に他ならないことが明らかになる。つまり空想を現実から辨別する「中立性」とは畢竟、かかる欲求の失効の謂なのである。

上来の議論から、フッサールの「自由変更」理論への批判——すなわち空想上の対象は擬似的な時間位置を有する点で本質とは相似て非なるものである以上、あくまでも空想に依拠せざるをえない自由変更という方途によっては、真の意味での本質直観は原理的に果たされえないのではないかという批判——が本論文の結論として得られることになる。

(論文審査の結果の要旨)

その最初期から晩期にかけて立場の転変と深化を不断に遂げたとはいえ、フッサールの現象学は何と言っても知覚経験の分析こそを終始その主眼としていたと断じても過言ではない。しかも啻にフッサールの場合のみならず、一般に現象学の根本問題が知覚に他ならぬことは、フッサール以後の現象学を牽引したM.メルロ＝ポンティの著、その名も『知覚の現象学』という金字塔が端的に示している通りである。現象学における如上の主流を知悉しているにも拘らず——否、却って知悉していればこそ——申請者は敢えて人跡疎らなる小径を独行せんとする。すなわちフッサール現象学を論ずるに当たって、本論文は現実世界の知覚に代えるに、空想を以てその主題となすのである。内外の先行研究を遍く渉獵してみても(J. P.サルトルによる古典的な想像力論等、ごく一部の例外を別にすれば)現象学的空想論は今尚僅少であると言わざるをえない。前・後期の別を問わず、フッサールの空想論を丹念に検討し、以てその全体像を再構成すると共に、その空想論の要諦が空想の「中立性」(ひいては空想による「唯一の世界への統一の欲求」の無効化)の重視にある点を鮮やかに喝破する本論文は、今述べたような欠落を補う好個の研究として、斯学において嚮後相応の位置を占めることであろう。

しかしながら本論文の価値は如上の点に尽きるものではない。以下、本論文に関して特筆大書に値すると思われる三つの点をそれぞれ屢述していくことにしたい。

まず本論文の第一の特色は、空想という現象をそれそのものとして分析することを通して、最終的にはフッサール現象学の方法論を根本的に吟味し直すことを目指している点にある。その際、申請者が特に再考の俎上に載せるのは、空想によって次々に変奏されていく数々の多種多様な対象の系列から、それらを貫く同一の主題とでも言うべき共通項を「本質」として取り出さんとする「自由変更」の方法である。周到綿密な議論を一つ一つ積み重ねていくことによって、申請者は最終的に、この方法の問題点を二つ別決する。まず自由変更が全面的に依拠している空想は当の空想世界の対象に対して、現実世界のそれに擬似的な時間位置を必ず割り当てることになるが、しかるにこのような時間位置は、フッサールの所謂「本質」とっては全く以て無縁であるという点である。つまり自由変更が空想を通して露わにする空想の対象は、本質と相似て非なるものに他ならない以上、我々はフッサールに抗して、自由変更を本質直観の手法として認めるわけにはいかぬのである。第二の問題点は、自由変更において空想は「我々の事的生活とは全く無関係」であり、「あらゆる事実性から解放されている」旨を殊更に説くフッサールの主張である。これに対して申請者は、空想が現実的な感覚、及びそれまでの経験に動機づけられて発生すること、そして更にはそうした現実体験の動機づけなしには空想はそもそも発生しえないことを示すことで、自由変更における空想の完全なる自由と純粹性を強調するフッサールに敢然と疑義を呈するのである。自由変更理論というフッサール現象学の根幹に向けられた以上の批判は、専ら文献学的研究に汲々とする記問の学の通弊に兎角陥りがちな現今のフッサール研究に一石を投ずる稀有な試みとして評価せられるべきである。

本論文の特色として第二に挙げられるべきは、上述の如くフッサールの空想論の全貌を再構成する作業を通して、申請者がフッサールの前期思想を特徴づける静態的現

象学と後期の立場である発生的現象学の接合を試み、以てフッサール現象学の変遷に関する一箇の統一的な解釈を企てている点である。このことは就中、静態的現象学における「潜在性」の概念とその後の発生的現象学における「受動性」の概念の異同を詳らかにしつつ、両概念の架橋を図る本論文第四章において顕著である。なるほどフッサール現象学の全容の統一的解釈という課題の壮大さに比して、当該の論述は質量共に未だ十分であるとは言えない。しかしながらそれでも尚、空想における中立的潜在性の領域に注目し、そこに受動性の次元と一脈通ずるものが伏在している点を的確に指摘した申請者の議論は傾聴に値する。

第三に本論文は第二章においてアリストテレスの「エネルゲイア」の概念を取り上げ、その丹念な分析を通して、これがフッサールの「現実(Wirklichkeit)」概念に影響を及ぼしたと思しき痕跡を仔細に追跡している。「現実」なるものの理解に関してフッサールがアリストテレスの強い影響下にあったことを示す資料は、管見の限りでは未だ発見されていないものの、両者の比較思想という形式を取った申請者の議論は（文献学的にはいざ知らず）哲学的には極めて啓発的であり、現実性をめぐる我々の思索に裨益するところ大である。

本論文には一潜在性概念と受動性概念の近似性や、アリストテレスとフッサールの類縁性といった一独自の主張の論証に関して、未だ委曲が尽くされていない憾みがない訳ではない。とはいえ上来述べ来たった如く、本論文における申請者の努力と創意工夫には多なるものがあり、相応に評価せられるべきであろう。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また令和二年一月三十一日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第十四条第二項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： \_\_\_\_\_ 年 \_\_\_\_\_ 月 \_\_\_\_\_ 日以降